

韓国語教育における翻訳の活用の試み

—大江健三郎『万延元年のフットボール』の韓国語翻訳を事例に—

李 承 俊

1

本稿は、大江健三郎『万延元年のフットボール』（『群像』1967年1月号～7月号）を取り上げ、日本語の原典と韓国語の翻訳版を合わせて検討し、日本語を母語とする韓国語学習者に対する韓国語教育において、日本文学の韓国語翻訳をいかに活用することができるかについての提言を行うものである。本稿における、日本語を母語とする韓国語学習者は、日本語および韓国語の文学テキストの読解が可能な中・上級者に限定する。

本稿において使用するテキストの情報について簡単に述べる。大江健三郎の日本語テキストは、現在もっとも入手しやすいと思われる『万延元年のフットボール』の文庫版（講談社、1988年）から考察する。韓国語テキストは、朴裕河訳『만연 원년의 풋볼』（웅진지식 하우스、2017）を用いる。この韓国語訳版は、『만연 원년의 풋볼』というタイトルで2000年に고려원という出版社から刊行されたものが、出版社の倒産によって絶版となり、それが2007年に웅진씽크빅という出版社によって再出版されたのが再び絶版になり、웅진지식 하우스という出版社から再出版された、という経緯を持つものである。再出版に際して、「万

延」という年号を韓国語の漢字の音読みそのまま表記した「만연」を、日本語読みを韓国語で表記した「만엔」に改めた。

『万延元年のフットボール』を取り上げる第一の理由は、1994年にノーベル文学賞を受賞した大江健三郎の代表作に数えられ、その文学的な普遍性が認められているからである。周知の通り、日本国籍の作家としては、1968年に川端康成が受賞し、1994年に大江健三郎が受賞した。だが、両者がノーベル賞を受賞できた理由は、正反対とっていいだろう。大江健三郎がノーベル文学賞を受賞した直後の新聞記事を見れば、川端康成は「極めて日本的な文学として評価され」受賞したが、大江健三郎は「世界中の人々に共通する人間的なものとして理解され」受賞した、と報じられている。そこで、源氏物語から戦後文学に至るまで、日本文学がいかに翻訳されているのかが簡略に紹介されている。⁽¹⁾

『万延元年のフットボール』を取り上げる第二の理由は、翻訳を通じて全世界の読者に読まれることで世界文学としての普遍性が認められるようになった大江健三郎の小説テキストの中でも、特に作中における独特かつ難解な日本語が注目されたからである。かといって、これは日本語としてよくない、何を意味する日本語なのかわからない、といったような評価がなされたわけではない。むしろ、既存の日本語の語彙や文法や表現などに対する徹底的な解体と再構築に向けての苦悩の結果として、それが高く評価されたわけである。

『万延元年のフットボール』の文体や日本語に注目した先行研究は、その豊かな日本語表現が、既存の日本語に対していかなる可能性を有するものかを分析した。先行研究において『万延元年のフットボール』に注目する理由は、先述したような、本稿で『万延元年のフットボール』を取り上げる理由とほぼ重なるといえる。まず日本語学のアプローチとして、角田敏郎は、小説において詩的なイメージを呼び起こす表現を「比喩」と「心象」の概念を導入して分析した。⁽²⁾ 藤本拓自は、小説における

共感覚表現を抽出して分析した⁽³⁾。両者とも、小説における日本語の特徴を詩的な言語とし、その様相と特徴を明らかにしたものである。また、日本文学のアプローチとして、小森陽一は、第1章の冒頭に対する精密な読解を行い、小説における日本語の特徴を明らかにした⁽⁴⁾。

このように、日本語学からも日本文学からも、『万延元年のフットボール』における日本語表現の意味や意義が分析されてきた。というのは、日本語を母語とする韓国語学習者が、『万延元年のフットボール』という小説と触れ合う経験は、自らの母語としての日本語について考えてみる経験につながる。

日本語を母語とする韓国語学習者が、韓国語をアウトプットする場合、そこには必然的に翻訳のプロセスが介入することになる。比較文学研究者の大澤吉博は、文学テキストにおける翻訳の様相を「原文尊重主義」と「訳文尊重主義」の二つに分け、「そのどちらが良いとも言えない。重要なのは、そうした異なる翻訳概念の中で、一体いかなる翻訳が作られ、どのような影響を読者に与えたかを知ることであろう」と述べている⁽⁵⁾。日韓の翻訳のことを念頭においての大澤の言葉を受けて、日本語を韓国語に「翻訳」することで成り立つ韓国語のアウトプットにおける、より日本語に寄り添ったアウトプットを「原文尊重主義」とし、これに対してより韓国語に寄り添ったアウトプットを「訳文尊重主義」としよう。そして、以下のように言い直してみたらどうか。〈そのどちらが良いとも言えない。重要なのは、そうした異なるアウトプットのための「翻訳」概念の中で、一体いかなるアウトプットが作られ、どのような影響を読者＝聴者すなわちアウトプットされる者に与えたかを知ることであろう〉。

外国語を上達させるためには、その外国語を学習して理解する上で、言語的な媒介とされる母語に対する理解も同様に深められなければならない。日本語と韓国語に限って言い直せば、日本語をもって韓国語を学

習する以上、韓国語学習において日本語と韓国語は同時に思考されるといっていいだろう。日本語を母語とする韓国語学習者に日本語の「原文尊重主義」と韓国語の「訳文尊重主義」のあいだを柔軟に橋渡りできるような思考を培養するために、翻訳された文学テキストはきわめて有効な教材になると思われる。

日本語原典を韓国語に翻訳したテキストを取り上げるのは、母語と外国語の相互作用を通じてより効果的な外国語教育が実施できると考えられるからである。学習者の言語的な思考のベースをなしている日本語的なものをすべて切り取り、もっぱら韓国語らしさを重視する「翻訳尊重主義」に傾倒した外国語学習は、論理的な作文や発言などに要求される、高度の外国語能力に達するように導くことができないだろう。これを言い換えれば、日本語原典のテキストの韓国語翻訳を活用することで、「翻訳尊重主義」つまり韓国語らしい表現を重視したアウトプットだけではなく、「原典尊重主義」つまり原典の日本語の意味に忠実なるアウトプットも合わせて可能となる韓国語教育が実現され得ると考えられるのだ。

このような問題意識から本稿では、大江健三郎『万延元年のフットボール』の日本語原典と韓国語翻訳を合わせて検討し、日本語を母語とする韓国語学習者に対し、文学テキストをいかに活用することができるかに関する提言を行う。その際、主に原典となる日本語がいかに翻訳されているのかを考察し、そのような翻訳が学習者に読まれていることを前提とした上で、そこからいかなる韓国語教育を考えることができるかに関しての説明を行う。具体的には、第一に、章立ての翻訳の様相を検討し、韓国語教育への活用について述べる。第二に、先行研究においても問題視されている小説の冒頭の翻訳の様相を検討し、韓国語教育への活用について述べる。第三に、作中の場面をいくつか取り上げて翻訳の様相を検討し、韓国語教育への活用について述べる。このような検討を通

じて、翻訳を用いて韓国語教育を行うことで、わかりやすく伝わりやすい韓国語を指導することができる、ということを明らかにする。

先述した通り、本稿における韓国語学習者を中・上級者に限定するために、語彙や文法などの表現が間違っていないかを問いただすものではない。⁽⁶⁾日韓の表現を同時に取り上げて照らし合わせることによって浮上する言語的な地平を拓く試みでもある。

2

『万延元年のフットボール』は、総13章で構成されているが、各章に章題が付けられている。その日本語原典と韓国語翻訳を比較することからはじめる。

- 1 死者にみちびかれて
- 2 一族再会
- 3 森の力
- 4 見たり見えたりする一切有は夢の夢に過ぎませぬか
- 5 スーパー・マーケットの天皇
- 6 百年後のフットボール
- 7 念仏踊りの復興
- 8 本当のことを云おうか
- 9 追放された者の自由
- 10 想像力の暴動
- 11 蠅の力。蠅は我々の魂の活動を妨げ、我々の体を食ひ、かくして戦ひに打ち勝つ。
- 12 絶望のうちにあって死ぬ。諸君はいまでも、この言葉の意味を

理解することができるであろうか。それは決してたんに死ぬことではない。それは生まれでたことを後悔しつつ恥辱と憎悪と恐怖のうちに死ぬことである、というべきではなからうか。

13 再審

제 1 장 망자 (亡者) 에게 이끌리다

제 2 장 가족의 재회

제 3 장 숲의 힘

제 4 장 보거나 보이거나 했던 모든 것은 꿈속의 꿈에 지나지 않았던 걸까?

제 5 장 슈퍼마켓 천황

제 6 장 백 년 후의 풋볼

제 7 장 되살아난 염불춤

제 8 장 진실을 말할까?

제 9 장 추방당한 자의 자유

제 10 장 상상력의 폭동

제 11 장 파리의 힘. 파리는 우리 영혼의 활동을 방해하며 우리의 육체를 먹고, 그리하여 싸움에서 이긴다.

제 12 장 절망 속에서 죽는다.

제군들은 지금도 이 말의 의미를 이해할 수 있을까.

결코 그냥 죽는 것이 아니다.

그것은 태어난 것을 후회하면서, 치욕과 증오와 공포 속에서 죽는 일이라고 말해야 하지 않을까.

제 13 장 재심 (再審)

「1 死者にみちびかれて」の韓国語訳「제 1 장 망자에게 이끌리다」の場合、「死者」を「망자 (亡者)」にした翻訳から、ほとんど同一の意

味を有する日韓間の語彙をいかに使い分けるかに関する教育のために活用することができる。韓国語にも「死者」を意味する、同一の漢字の「사자」という語はあるが、ここでは日本語にすれば「亡者」にあたる「망자」に翻訳されている。「亡者」とは、成仏できていない死者の魂を意味する仏教用語から来た語である。本小説における、暴動を指揮する「鷹」が、「S兄さん」や「曾祖父の弟」という死者の魂に自分のアイデンティティーを重ね合わせることや、念仏踊り(염불춤)という仏教的かつ民俗的な伝統行事から暴動に発展されていくというストーリーからして、仏教用語に由来する「망자」にした翻訳は、原典における「死者」という語の持つ意味合いをよりわかりやすく示すと同時に、「망자」という語そのものの持っている意味合いも、それに重なって自然に浮かび上がるように働きかけられると思われる。日本語を母語とする韓国語学習者にとって日本語と韓国語の間の類似性だけを重視し、漢字語が共通するという類似性から日本語の漢字語をそのまま韓国語の漢字語に当てはめることが、必ずしも絶対的に有効ではない。「死者」を「亡者」の「망자」にした翻訳からわかるように、伝えようとする意味合いやイメージを把握し、より適切と思われる語彙や表現にすることで、より豊かな韓国語を運用することができる。

「7 念仏踊りの復興」の韓国語訳「제 7 장 되살아난 염불춤」の場合、日本語の意味を保持しつつ、韓国語として成り立つ他の形の表現が用いられている例として活用することができる。「염불춤의 부흥」と直訳しても問題はないだろうが、名詞と名詞の間に位置する助詞「の」の韓国語「의」をもって翻訳する代わりに、よみがえる・生き返るを意味する「되살아나다」の連体形が活用されている。これも、日本語と韓国語の類似性に頼って直訳することが絶対的ではない、ということに関する事例といえる。同様の意味合いをあらわすことができる別の表現を用いることで、より豊かな韓国語を運用することができる一例になろう。

同様に、「2 一族再会」を「제 2 장 가족의 재회」にしたのも、直訳にこだわる必要がないことを考える上でいい事例となる。直訳すれば「일족재회」になるだろうが、第2章ではアメリカから帰ってくる「鷹」と「蜜」夫婦の再会の場面が主に描かれている。本小説におけるストーリーの主軸が、「鷹」と「蜜」に代表される「根所」家族の歴史である点からして、「일족」ではなく「가족」に翻訳されて差し支えはないと判断される。むしろ、韓国語として少々古風な感じもなくはない「일족」より、よりわかりやすい「가족」にされているところは、「一族」という日本語も現代日本語としてそれほど日常的によく使われているわけではない、という点と呼応しているともいえよう。日本語をベースに韓国語表現を想定するときに、必ずしも日本語原文にこだわってそれを直訳する必要はない。このような、日本語原典の有する意味合いやイメージを活かす範囲で、韓国語らしい韓国語に翻訳するという、日韓の言語間を相渡る柔軟な思考によって、わかりやすく伝わりやすい韓国語が浮かび上がると思われる。

「8 本当のことを云おうか」の韓国語訳「제 8 장 진실을 말할까?」の場合は、日本語の形式名詞「こと」を韓国語にいかに処理すればいいかに関する教育に活用することができる。「本当のこと」を韓国語に直訳すると、「진짜의 것」くらいになるだろうが、どうも不自然である。本小説における「本当のこと」とは、「鷹」が知的障害のあった「妹」と性関係を持つようになり、それによって結局は「妹」の自殺をもたらした、という過去のできごとである。「鷹」における、スーパーマーケット襲撃の指揮などにあらわれるような極度の暴力追求は、このような過去のできごと起因する自己処罰の欲動と結びつくものである。この「本当のこと」を兄の「蜜」は知らず、小説の後半で「鷹」によって「本当のこと」の白状が「蜜」に対して行われることになる。つまり、「鷹」が隠していた自分の内面における真実のようなものが白状されるのであ

る。もし、韓国語学習者が「本当のこと」という日本語を想定した上で、それを韓国語をもって伝えようとしていると仮定するならば、「本当のこと」の中の形式名詞にこだわらずに、「真実」にあたる「진실」という語彙を用いて、韓国語らしい表現を重視してアウトプットしたほうがよりスムーズなコミュニケーションにつながると思われる。同様の意味で、「事実通りに云おうか」の意味になる「사실대로 말할까?」⁽⁷⁾の翻訳もいい例になろう。この例は、より物語内部の状況に寄り添った翻訳になるとと思われる。

「11 蠅の力。蠅は我々の魂の活動を妨げ、我々の体を食ひ、かくして戦ひに打ち勝つ」の韓国語訳「제11장 파리의 힘. 파리는 우리 영혼의 활동을 방해하며 우리의 육체를 먹고, 그리하여 싸움에서 이긴다」の場合は、韓国語の書き言葉において日本語より読点が少ないことを示す。一般的に韓国語の文章の場合、読点が連続して使われている文章はいい文章として見なされない。これに対して日本語の場合は、韓国語に比べて読点の制限など特になく、より自由に読点を運用することができる。むしろ、適切に読点が打たれていないとよくない文章にみなされるといいだろう。日本語原文において「妨げ、我々の」のところが「방해하고, 우리의」といったように、読点を用いる表現にせず、「방해하며 우리의」のような読点を必要としない文章にしたところから、日本語と韓国語における読点の打ち方の違いについて指導することができよう。

このことと関連して付け加えると、日本語を母語とする韓国語学習者が韓国語で文章を書く際に、どうしても母語の習慣で、読点を多用するケースをしばしば目にする。そのような学習者に対して、読点を必要としない表現を適切に導入し、読点を減らすことでより韓国語らしい文章になる、ということを指導することが要求される。読点に関しては、また後述する。

以上、『万延元年のフットボール』における章立てを中心に日本語原

典と韓国語翻訳を比較し、日本語を母語とする韓国語学習者に対して、翻訳を用いていかなる韓国語教育の地平が拓かれるのかに関して述べた。次節では、小説の本文を用いて論じる。

3

先述した通り、『万延元年のフットボール』の冒頭は、日本語表現の側面からよく取り上げられてきた。ここでは、その冒頭の部分に焦点を当て、それがいかに韓国語に翻訳されているのかを比較することで、該当テキストを活用していかなる韓国語教育を行うことができるかに関しての提言を行いたい。

まず、小説のはじまりの文章の日本語原典および韓国語翻訳を引用する。

夜明けまえの暗闇に目ざめながら、熱い「期待」の感覚をもとめて、辛い夢の気分の残っている意識を手さぐりする。⁽⁸⁾

채 밝지 않은 새벽의 어둠 속에서 눈뜨며 고통스러운 꿈의 여운이 남아 있는 의식을 더듬어 뜨거운 ‘기대’의 감각을 찾아 헤맨다.⁽⁹⁾

難解な日本語原典の文章を、句の順番を入れ替えた韓国語翻訳と比較してみると、日本語原典より韓国語翻訳のほうが読みやすくなっており、わかりやすくなっているのがわかる。小森陽一は、この文章における難解さをめぐって、術語を統合する主語の欠落から論じているが、韓国語翻訳に主語が付け加えられているわけではない。この翻訳におけるもっ

とも特徴的なのは、句の順番を入れ替えたところである。仮に、「夜明けまえの暗闇に目ざめながら」＝「채 밝지 않은 새벽의 어둠 속에서 눈뜨며」を①に、「熱い「期待」の感覚をもとめて」＝「뜨거운 ‘기대’ 의 감각을 찾아 헤맨다」を②に、「辛い夢の気分の残っている意識を手さぐりする」＝「고통스러운 꿈의 여운이 남아 있는 의식을 더듬어」を③にしてまとめると、日本語原典は①②③、韓国語翻訳は①③②の順になる。②と③の順番を入れ替えたのが、韓国語翻訳の特徴といえる。

翻訳論の観点からすれば、このように順番を入れ替えた翻訳は、小説全体の構成的な面からして、小説に対する理解を高める一助となる。引用の文章が含まれている段落に後続する段落のはじまりの文章は、「眼ざめるたびに、うしなわれた熱い「期待」の感覚をさがしもとめる」(7頁)である。藤本拓自の指摘によれば、「熱い「期待」の感覚」という表現に、『万延元年のフットボール』の主題が凝縮されている⁽¹⁾。韓国語の引用に見られるように、「熱い「期待」の感覚をもとめて」を文章の最後にしつつ、「뜨거운 ‘기대’ 의 감각을 찾아 헤맨다(熱い「期待」の感覚をもとめる)と文章を終える形にすると、後続する段落のはじまりの「眼ざめるたびに、うしなわれた熱い「期待」の感覚をさがしもとめる」という文章とも照応するようになる。これによって、本小説の主題が凝縮された表現が繰り返され、そこで小説の主題が強調される効果を生むようになる。また、本小説における日本語の難解さが指摘されていることと合わせて考えると、このような効果は、小説そのものに対する理解の深化だけではなく、小説に書かれた日本語に対する理解の深化をも促すものであろう。

このように、韓国語翻訳を参照することで、日本語原典の理解が深まる、ということは、翻訳というものを適切に活用することで、外国語だけではなく母語に対する理解も深まる、ということができる。先述したように、外国語を学習して理解するには、そのために媒介される母語に

対する理解も同様に深められなければならない。日本語原典の文学テキストの韓国語翻訳を韓国語教育に用いることで、韓国語だけではなく、日本語に対する理解もともに深まり、それと連動して韓国語に対する理解も深まると思われる。

語彙レベルから引用文を考えてみると、「手さぐりする」を「더듬다」に、「もとめる」を「찾아 헤매다」に翻訳した部分を活用して、原典の意味を保ちつつ韓国語としても適切な語彙を選択した例を提示することができる。「手さぐり」の意味は、手先の感じに頼って探し求める、探し求めることになるだろうが、「더듬다」の意味にも同様に手で触る、という意味合いが含まれている。「더듬다」という訳語は、「手さぐり」における「手」を韓国語の「손」をもって翻訳しなくても、そのような身体的な接触の意味まで含有している。「もとめる」を、「探し求める」の韓国語翻訳として想定される「찾아 헤매다」と翻訳することで、「手さぐり」に含まれている意味合いや、「手さぐり」が連想させるイメージが、「찾아 헤매다」という訳語と連携される形で再びあらわれることになり、文章全体が志向する意味合いやイメージがよりわかりやすく伝わる。また、後続する段落のはじまりの文章が「眼ざめるたびに、うしなわれた熱い「期待」の感覚をさがしもとめる」であることを考えれば、その韓国語翻訳の「눈뜰 때마다 잃어버린 뜨거운 ‘기대’ 의 감각을 찾아 헤맨다」における「さがしもとめる」=「찾아 헤매다」が、引用の文章の「もとめる」を「찾아 헤매다」に翻訳したところと呼応しているのがわかる。

以上、小説の冒頭の文章を中心に、その日本語原典と韓国語翻訳を比較することで、日本語を母語とする韓国語学習者にいかなる教育が可能かについて考えてみた。次節では、作中における表現をいくつか取り上げながら考えたい。

4

ここでは、『万延元年のフットボール』の中から、日本語を母語とする韓国語学習者に対して、効果的な韓国語教育の実施のために役にたつと思われるところを取り上げて分析する。

鷹四が教育本能を発揮する。僕はかつてそのようなタイプの間人としての弟を見たことがなかった。弟が権威をこめて若者に、もう飲むな、人生はしらふでやってゆかなければだめだという。それだけで若い日傭い労働者が、かれの自己破壊的な生活を改造する。そして若者はその思い出を余裕たっぷりに微笑しながら話している！
(53頁、強調省略)

다카시가 교육 본능을 발휘하다니! 나는 일찍이 동생을 그런 식으로 본 적이 없었다. 동생이 권위적으로 소년에게 더 이상 마시지 마라, 인생은 맨정신으로 살아나가야 한다고 말한다. 그것만으로 일용직 노동자가 자신이 자기 파괴적인 생활을 개조한다. 그리고 소년은 그런 기억을 여유 만만한 미소를 띠고 이야기하다니!
(62頁)

この日本語原典と韓国翻訳の比較から、日本語を母語とする韓国語学習者に対して、先述した「原文尊重主義」と「訳文尊重主義」のいずれにも偏っていない韓国語表現を提示することができると思われる。言い換えれば、原典の意味合いやイメージを保持しつつ翻訳としての柔軟性を発揮することで、原典における意味合いやイメージをよりわかりやすく伝えることができた事例といえよう。冒頭の、日本語原典における平叙文が韓国語翻訳においては感動文に翻訳されており、それによって兄の

「蜜三郎」における弟の「鷹四」に対する認識が覆される場面としてのインパクトがより強くなっている。一見すればやや過剰な「訳文尊重主義」に見えがちだが、最後の文章での、「その思い出を余裕たっぷりに微笑しながら話している」「若者」が思い出すこととは、それまで考えられなかった「鷹四」の、「教育本能を發揮する」様子になる。引用のはじまりの文章とおわりの文章がともに喚起するイメージとは、「見たことがなかった」「鷹四」の新たな面である。このようにしてみれば、はじまりの平叙文の「鷹四が教育本能を發揮する」を、感動文の「다카시가 교육 본능을 발휘하다니！」（鷹四が教育本能を發揮するとは！）に翻訳したことによって、段落全体がいかなる意味合いやイメージを伝えようとしているのかが、よりわかりやすくなると思われる。「原文尊重主義」を頑なに守るかのように原典に忠実しているわけではないものの、決して原典の意味を壊さず、原典の志向する意味合いがわかりやすく伝わり得るように翻訳されていると思われる。

次に、韓国語翻訳において日本語原典の読点がどう処理されているのかについて考えたい。

素裸の鷹四が駆けるのを止めてしばらく歩き、それから雪に膝をつけて、両手で雪を撫でまわした。僕は鷹四の痩せて角ばった尻と無数に関節をそなえた虫の背みたいに柔軟に折り曲っている長い背を見た。(241頁)

벌거벗은 다카시가 달리던 것을 멈추고 얼마 동안 걸다가 눈 위에 무릎을 꿇고 양손으로 눈을 어루만졌다. 나는 다카시의 야위어 앙상한 엉덩이와 무수한 관절을 갖춘 벌레처럼 유연하게 구부러져 있는 긴 등을 보았다.(297頁)

できる限り日本語原典における読点を省略した韓国語翻訳のほうが、日本語原典における意味合いやイメージを伝えることができるだけではなく、韓国語としてもわかりやすい。言い換えれば、日本語原典における意味合いやイメージが伝わりやすくなっているのは、韓国語としてわかりやすく翻訳されているからである。「歩き、」、「ついて、」、「撫でまわした」のように、読点によって区切られながら進められている文章の読点をすべて削除し、「걷다가」、「꿨고」、「어루만졌다」でつなげている。原典通りに翻訳してみると「얼마 동안 걷고, 그러고는 눈 위에 무릎을 꿨고, 양손으로 눈을 어루만졌다」のようになるだろうが、「歩き、それから」に含まれている意味を読点抜きの「걷다가」に翻訳し、続く読点も削除することで、スムーズに「鷹四」の一連の行動が韓国語を通じて描写されている。

韓国語翻訳で読点抜きによって実現され得るわかりやすさと伝わりやすさを強調する理由は、それが話し言葉や会話においてもっとも重要なところだからである。いうまでもなく、会話で読点が可視化されることはない。書き言葉においては明確かつ正確に打たなければならない読点だが、話し言葉においてはそうではない、といってもいい。要するに、韓国語の書き言葉においても話し言葉においても、読点にあたる部分は少ないほうがより自然な韓国語になるがゆえに、このように読点を適切に省略した、日本語原典の韓国語翻訳を韓国語学習に活用することで、書き言葉と話し言葉の両方におけるわかりやすさと伝わりやすさを提示することができるのだ。

僕と妻と若者とは、なかば凍っている泥濘にぎくぎくと踵の減りこむ不安定な前庭を歩き滞みながら、黙りこんでいた。暗い無音の陥没たる谷間は、覗きこむと底しれぬ堅穴のように感じられ、そこから湿って冷たい風が吹きあげてきた。(366頁)

반쯤 얼어붙어 있는 진흙땅에 뒤꿈치가 쑥쑥 빠지는 불안정한 안뜰을 어렵사리 걸으면서 나와 아내와 소년은 침묵을 지키고 있다. 어두운 정적의 함몰부같이 골짜기 마을은 들여다보면 바닥 모를 구멍처럼 느껴졌고, 축축하고 차가운 바람이 불어 올라왔다. (456頁)

日本語原典では四つ打たれている読点が、韓国語翻訳では一つしか打たれていない。もし原典通りの読点を挿入すると、以下のような文章になる。

반쯤 얼어붙어 있는 진흙땅에 뒤꿈치가 쑥쑥 빠지는 불안정한 안뜰을 어렵사리 걸으면서, 나와 아내와 소년은, 침묵을 지키고 있다. 어두운 정적의 함몰부같이 골짜기 마을은, 들여다보면 바닥 모를 구멍처럼 느껴졌고, 축축하고 차가운 바람이 불어 올라왔다.

そもそも文章の冒頭にある「僕と妻と若者」という主語を、文章全体を締めくくる述語の直前に移動させたこととあいまって、読点が少ないほうがより読みやすく、したがって文章の意味合いやイメージがよりわかりやすく伝わってくるのが確認できるだろう。両者を、声を出して読み上げてみると、それは一目瞭然である。

以上、『万延元年のフットボール』の日本語原典と韓国語翻訳の比較を行った。その際には、主に二つの側面から比較を行った。第一は、韓国語らしく翻訳することで、韓国語として自然であるとともに、日本語原典における意味合いやイメージがより活かされる。第二は、第一の側面と関連するものだが、日本語原典の読点を減らす工夫を施すことで、よりわかりやすく伝わりやすい韓国語翻訳にすることが可能で、これは話し言葉の学習においても活用できるものである。

5

ここまで、大江健三郎『万延元年のフットボール』の日本語原典と韓国語翻訳の比較を通じてあらわれる問題や示唆を、日本語を母語とする韓国語学習者に対する教育において、いかに活用することができるかについての提言を行った。

現代世界において異なる言語間のコミュニケーションを可能にする行為は、翻訳である。外国語を学習する者が、母語を媒介せずに外国語を学習し、その外国語をものにするのは、不可能である。母語という回路を通じて、外国語の語彙や文法などの運用を身につける。そのような学習した外国語をアウトプットする場合も、母語を媒介せずに外国語が成り立つことは考えられない。まずは、言語的な思考のベースとなる母語を通じて伝えたいことを想定し、それに関する言語的な枠づけを母語をもって行い、外国語に切り替えることができるような段階までその意味合いやイメージが明確化されたら、外国語を通じてアウトプットされるようになるのではないだろうか。要するに、外国語学習の最終的な目標が、書き言葉としてであれ、話し言葉としてであれ、外国語の適切かつ的確なアウトプットであるのであれば、そのような目標を効果的に達成するためには、翻訳というものに対する認識を深める必要があるのである。本稿は、このような問題意識から構想されたものである。

本稿の問題意識を文学研究に絡めながら記すればこうなる。比較文学的な観点に基づく、世界文学をめぐる議論において、翻訳という行為やプロセスがもたらす効果と可能性は長い間議論されてきた。世界文学をめぐる議論が有効な理由は、現代という時代においてグローバル化が加速化されつつあるからにほかならない。大学などの高等教育機関において外国語教育が活性化される理由は、このような現代のグローバル化に適應できる、グローバル社会の中で活躍できる人材を育成するためであ

ろう。翻訳というものは、グローバル化する国際社会の中で活躍する人材を育成する上で、特に外国語教育において、非常に重要な教育課題であると考えられる。

本稿で試みた提言は、まだ抽象的なところも多い。だが、長い期間にわたって一定の数の需要者を確保しており、なおかつ今後においてさらなる需要者の増加が予想される韓国語の教育において、様々なニーズに合わせて多様な教材やコンテンツを活用し、高いレベルの韓国語が運用できる人材を育成することは、現在の硬直した日韓関係の進展においても、非常に重要であると考えられる、ということをつけ加えておく。

注

- (1) 「大江健三郎氏 魂のレベルで「生」問う 普遍の主題、世界に刻む」『朝日新聞』1994年10月14日。
- (2) 角田敏郎「比喻と心象—小説『万延元年のフットボール』を例として」『語学文学』第6号、北海道教育大学語学文学会、1968年、10～18頁。
- (3) 藤本拓自「文学作品における共感覚表現について—大江健三郎『万延元年のフットボール』を中心に」『言語文化学会論集』第17号、言語文化学会、2001年、129～143頁。
- (4) 小森陽一「「乗越え点」の修辞学—『万延元年のフットボール』の冒頭分析」『季刊文学』第6巻第2号、岩波書店、1995年。
- (5) 大澤吉博「比較文学研究と翻訳」『言語のあいだを読む一日・英・韓の比較文学』思文閣出版、2010、28～44頁。
- (6) 유은경は、夏目漱石や川端康成など、韓国で愛読されている日本文学を韓国語翻訳の問題点や誤訳を摘出する一連の研究に取り組んだ。유은경「『마음』번역의 문제점 ‘선생님과 유서’를 중심으로」『日本語文学』第71輯、日本語文学会、2015、381～400頁、など。一方で、大澤吉博は、「誤訳」や「原文の歪曲」の指摘することが絶対的な価値を有するわけではないと

- いう立場に立ち、翻訳というプロセスによって推し進められる文化的な側面を強調する。本稿における翻訳を通じての比較は、大澤の立場に寄り添うものであることを記しておく。吉澤吉博「言語の間の漱石「夢十夜」第八夜」、前掲『言語のあいだを読む一日・英・韓の比較文学』、221～251頁。
- (7) NAVER 지식백과 「동양의 고전의 읽는다 만엔 원년의 풋볼 백년을 뛰어 넘는 역사와의 교감」、<https://terms.naver.com/entry.nhn?cid=60611&docId=892525&categoryId=60611>（閲覧日：2019年9月30日）。
- (8) 大江健三郎『万延元年のフットボール』講談社、1988、7頁。以下、引用の際は引用文末に頁だけ記入。
- (9) 오에 겐자부로 / 박유하 역 『만엔 원년의 풋볼』웅진지식하우스、2017、8頁。以下、引用の際は引用文末に頁だけ記入。
- (10) 小森陽一は、「夜明けまえの暗闇に目ざめながら、僕は、熱い「期待」の感覚をもとめて、辛い夢の気分の残っている意識を手さぐりする」（下線は引用者による）とすればよりわかりやすくなるように、主語の欠落による難解さを指摘する。小森陽一「「乗越え点」の修辞学—『万延元年のフットボール』の冒頭分析」、前掲、55～59頁。
- (11) 藤本拓自「文学作品における共感覚表現について—大江健三郎『万延元年のフットボール』を中心に」、前掲、138頁。藤本によれば、カッコ付きの「期待」という語は、小説全編にわたって10例ある。また、柄谷行人は「熱い「期待」の感覚」が「この作品の基底に存在する気分であり、「存在感」そのものである」と述べる。柄谷行人「大江健三郎のアレゴリー」『底本 柄谷行人集 5 歴史と反復』岩波書店、2004、124頁。